

「ちやん、そんな手荒い事言ふて何うするねん今夜は夜も更けたあるよつてに、今夜は何も食べずに寝んね仕なはれな、何も食べんと寝んね仕なれ。何も食べんと寝んねせい、そうすると俺に食はすのんがおいしいねな、ちや俺の口をひじめるな」

「モシ、何とか言ふとくなはれ、此の人甚い勢いで怒つてはりますつせ」

「私しが、ひじめるなと言ふと、ヒー……………(泣く)」

「モシ、又、泣いてはりますつせ、一人で怒つたり、泣いたりしてはりますつせがな」

「松ちやん、何言ふね、今店の仕切でさへ箆を殺してこしらへたのに、お酒の五十本、茶碗蒸しの百やなんて、其んな手荒い事を云ふて、ウハハ……………」

「何と云ふ妙な顔をしなはるね」

「そうすると、銭が無いので、泣くねな、金が無いのでほえるねな、サア、是で買ふて来い、と、こゝで此の財布をドスンとほうり出してやりますね、そうすると、チヨコ〜と走つて行つて、財布を拾ふとすると重たいので、松ちやん、これお金やないか、あんだ、澤山お金持つてなはるねな」  
解つた、此間、住友はんへ賊が這入たと云ふ噂や、あんだ賊の片割れやないか、何賊の片割やあは言え、高津の富が當つたんぢや、マアそうか嬉しやの、あんだ何うするつもりや、何うの彼うの有るかへ、親方呼んどいで、證文持つといで、と、一文も直切らずに身請して、家を一軒建て、女ご

しの二人も置いて、あて朝風呂丹前で、朝起きたら、手拭を肩へ掛けて、揚子を叩へて、風呂へ行きまんね、歸ると、お酒の燗が出来て、小鉢を並べて、差向ひで、一盃飲みまんね、酔ふたら、オイ寝よか、目が明くと、手拭を肩に掛けて、揚子を叩へて、風呂へ行く、歸つたら、お酒が出来て、酔ふたら寝よか、目が明くと」

「モシ貴郎、風呂へ這入つて、一盃飲んで、寝てばつかり居なはる、それは富が當つてからの事だつせ、モシ富が當らなんだら、何うしなはるね」

「當らなんだら、うどん食べて寝ます」

群集は、ワア〜言ふて居ります、時刻がまいますと、世話方が、其處へ出て來まして、富饒の箱を持つて、ガラガラ〜と振ります、蓋を取つて中を一度改めまして蓋をすると、蓋の真中に丸い穴が有る、箱を戴きまして、ガラ〜と振りますと、子供が、錐を、プツツ、と、突差しますと、世話方が、其れを取りまして、大きな聲で「第一番の御富——」と聲が懸ります、と今迄、ワア〜言ふて居りました人が、一時に水を撒いた様に、シーンと致します。

「子の千三百六十五番——」

「フワ——」

「モシ、あんだ、何うしなはつたんや」